

Title	『遊心安楽道』の研究
Author(s)	愛宕, 邦康
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43331
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	愛宕邦康
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第16693号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	『遊心安楽道』の研究
論文審査委員	(主査) 教授 平 雅行 (副査) 教授 梅村 喬 教授 榎本 文雄

論文内容の要旨

『遊心安楽道』は新羅元暁の著として『安養集』『浄土厳飾抄』や法然の『選択本願念仏集』などに引用されており、日本浄土教の展開に大きな影響を与えた著作であり、凡夫正機を説いた文献としても名高い。ところが1914年に朝鮮で元暁の碑文が発見され、彼の没年が686年と確定したことによって、その没後に訳出された経典を引用している『遊心安楽道』は、元暁の著ではありえないことが判明した。本論文は、『遊心安楽道』の撰述者を明らかにするとともに、日本における『遊心安楽道』受容史の問題点を指摘しようとしたものである。本文は、全6章と序論・結論とからなり、枚数は約380枚(400字詰め換算)である。そのほか付属資料として、来迎院本『遊心安楽道』の翻刻を付している。

第一章では『遊心安楽道』の構成と内容が紹介され、元暁教学との思想的異同が吟味されて、凡夫往生を説く『遊心安楽道』は迦才『浄土論』の思想的影響のもとで元暁『両卷無量寿経宗要』を一般仏教学を背景に改変したものと結論している。第二章では、京都大原来迎院所蔵の『遊心安楽道』について検討している。本写本は従来、融通念仏の良忍(1073~1132)の手沢本とされてきたが、筆者は来迎院の聖教目録などを精査することによって、①来迎院においても当初はこれが良忍手沢本と認定されていなかったこと、②19世紀初頭になってから突如、良忍手沢本とされるようになったことを明らかにし、良忍の手沢説を否定している。

第三章では『遊心安楽道』の撰述者に関する先行研究を紹介してその問題点を指摘し、第四章では、その撰述者として東大寺華嚴僧の智憬(8世紀)を挙げて、彼の二人の師審祥と良弁の影響下で『遊心安楽道』が成ったとする。そして智憬は、新羅への留学僧審祥から元暁仏教学を継承し、良弁から不空羼索観音信仰を受け継いだと論じ、さらに智憬の『無量寿経宗要指事』『無量寿経指事私記』(現存せず)のいずれかが後に『遊心安楽道』と呼ばれることになったと推測している。

第五章、第六章では『遊心安楽道』を元暁の著と信じていた中世日本における元暁像のゆがみを取りあげている。高山寺明恵が制作した『華嚴宗祖師絵伝』「元暁絵」には、智拳印を結んだ民衆が数多く描かれているが、筆者はこれが光明真言を称えている姿であると指摘した。そしてこれらは、『遊心安楽道』に光明真言を勧奨している事実をもとに新羅で光明真言が流布していると考えた明恵の誤解による描写であると述べている。また浄土宗聖聡の著とされる『浄土三国仏祖伝集』(1416年?)では、元暁が入唐して迦才に伝法したとしている。元暁が入唐しなかったのは著名な事実であるが、筆者はこれを、浄土宗の相承系譜を再構築するために史料を拡大解釈することによって創

出したものである、と指摘している。

論文審査の結果の要旨

本論文の第一の成果は、『遊心安楽道』の撰者を8世紀の東大寺僧智憬と特定したことである。1959年に村地哲明が『遊心安楽道』元暁偽撰説を提起して以来、日韓の研究者によってその撰述者が推測され、①8世紀初頭から9世紀初頭の新羅僧撰述説、②10世紀半ばの叡山僧撰述説、③8世紀初頭の唐弘法寺系新羅僧撰述説、④8世紀半ばの新羅僧撰述説など、諸説が提示されてきた。しかしいずれの説においても、『遊心安楽道』が8世紀の新羅浄土教学と親近性を有している一方、朝鮮半島では確認できない光明真言信仰を鼓吹していること、さらには『遊心安楽道』が日本にしか伝存していないことを整合的に説明するものとはなっていなかった。それに対し筆者は、『不空罽索神変真言経』が既に8世紀の日本において浸透していたことを明らかにするとともに、新羅の浄土教学と光明真言信仰との接点に智憬が存していたことを解明して、きわめて蓋然性の高い学説を定立することに成功している。これは古代の日朝仏教史に対する重要な貢献である。

また『華嚴宗祖師絵伝』に描かれた智拳印を結ぶ新羅民衆の姿は、『遊心安楽道』を元暁の作品と信じた明恵の誤解の産物であったとの指摘も鋭いし、来迎院本が良忍の手沢本でなかったことの確認とその資料紹介も大きな貢献である。とはいえ、論述に繰り返しのめだつのが惜まれるし、智憬を基軸とした古代浄土教史の再構築もなお課題として残っている。しかし筆者が、斬新な問題提起をしてきた若手研究者であることからすれば、本論文での達成を踏まえて、自らの構想をさらに深めて行くことが期待されよう。本論文はその基礎となる価値を十分に有している。

本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。